明治の画人 中川耕斎

京都画壇の写実的画風を受け継ぐ

元長浜城歴史博物館館長
吉田一郎

長浜が県下で最も輝いていた明治という時代に、湖北地域で活躍した日本画家の中川耕斎は、長浜市山階町の人。私の曾祖父にあたる。

耕斎は岸駒に始まる京都画壇の岸派4代目・岸竹堂に入門して腕を磨いた。花鳥風月画を中心とした写実的画風は高い評価を受けた。四条派や狩野派風の漢画的作品も多く残している。

晩年には神照村村長もつとめ、大正11年に84歳で没した。翌年には70余人の門人らによって「耕斎先生碑」が自邸前に建碑された。交遊の深さと、多くの絵師を育ててきた証しでもあろう。

▲明治時代に湖北で活躍した画人・中川耕斎

岸竹堂に決定的な影響を受ける

中川耕斎は、天保9年（1838）8月27日、山階庄乾村（長浜市山階町）の百姓、吉左衛門の長男として生まれた。

幼名は梅之助。15歳で元服して龍輔と改めている。生来の虚弱体質で農業に不向きと悟り、幼少のころから隣村の川崎村の僧・淡崖師から絵の手ほどきを受け梅塘と名乗った。

20歳で彦根の絵師・吉田雪斎に師事して蓬仙と改め、24歳のとき上京して岸竹堂に師事し、耕斎と改号している。浩然堂とも号した。浩然堂は耕斎を初代とする中川家の家号となっていく。

耕斎が師事した岸竹堂は、岸駒に始まる岸派の4代目。岸駒は、大通寺（長浜市元浜町）新御座の襖絵「老梅図」の作者として知られている。竹堂は、当時の京都画壇の頂点にあった人で、和魂洋才を地でいく画法と評されている。花鳥画や龍虎をはじめとする動物画を得意としたが、四条派、加納派風の漢画的趣も強い。

耕斎は、この岸竹堂に決定的な影響を受けながら、27歳のころ、加賀や越前など、北国道や美濃地方などを歴遊している。「その妙技は愈々佳境に入るに至った」と、『長浜先人誌第一輯』（長浜市教育委員会編　昭和25年刊）には記されている。

19ページの年表で翁の生涯が一望できる。注目したいのは、

①20代の若さで多くの文人墨客と交友を深め、30歳、明治維新の年には郷里に帰って弟子の養成に努めていること

長浜の独創的なまちづくりと共に歩む
長浜デザイン工房(株)元氣や
TEL 0749-63-3746
種子島（鉄砲）のご縁で生まれた長浜の味
湖北長浜の味ごより
芋平
長浜店　長浜市元浜町8-19 TEL.0749-65-5546
大手門店　長浜市元浜町6-17 TEL.0749-65-5544
長浜市大宮町4-13　TEL.0749-63-3746

②30代は、大津県から坂田郡壱番組18ヶ村組合総代、長浜県からは庶務課勧業掛を、滋賀県から坂田郡第13区副区長を申しつけられるなど公務に励んでいること

③40代から60代にかけて画業に勤しみ、東洋絵画共進会、内国勧業博覧会、日本美術展覧会などにも出品していること

④67歳という高齢で坂田郡神照村村長に当選していること

などである。

賀宴の記録にみる交友の広さ

耕斎は、各地の絵画共進会や博覧会などに出品して名声を博しながら、地元にあって頼まれるまま軸物や屏風、襖絵を描き続けた。表紙の「呉二喬読兵書之図」は、絹本著色で、第3回内国勧業博覧会に出品された作品。51歳の作である。昭和56年に滋賀県立長浜文化芸術会館が主催した「長浜の先人・中川耕斎展」では27点が紹介されたが、地元に残る耕斎の作品数はつかみきれていない。

また、中川家の当主・中川景蔵さん（耕斎の曾孫）は、120個あまりの落款を所蔵している。

耕斎の存在と人脈は、古稀（70歳）や傘寿（80歳）の賀宴の記録などから偲ぶことができる。

▲「猛虎の図」（中川耕斎・画　吉田家蔵）

古稀の賀宴は、宮部鳳翔、草野耕山、小森竹塘らが発起人となって、長浜議事堂で開かれ、駅前の長浜静養館で余興が催されている。賛助会員には、石居四郎平、下郷伝平、柴田源七、中村寅吉、河路重吉、吉田芳水、沓水文治郎ら60名が名を連ねている。当時の長浜の政財界の名士であり、神照村村長をつとめただけに存在感が光っている。

古稀賀宴の通知文には「耕斎中川先生ハ地方絵画ノ妙手ニシテ其人ト為リノ淡白清廉ナルハ諸君ノ知悉セラルル所」として出席を呼びかけている。

宴会本席は「長浜議事堂ニ於テ酒饌ヲ供ス」とあるのは驚きだ。その寿宴役割には、受附、本席掛、贈呈スル画掛、揮毫席掛、宴会席掛、配膳掛、煎茶席掛、抹茶席掛、古書画陳列掛、寄贈書画陳列掛、瓶花盆栽掛、会場装飾掛、庶務掛など33人が準備にあたっており、その盛大さを偲ぶことができる。

80歳の祝いは門人、親友によって山階町の自邸で、大正6年4月の百花繚乱の季に催されている。悠々自適の暮らしぶりがうかがえるが、絵筆は死の直前まで離さなかったようだ。私の母（耕斎の孫）が譲り受けた猛虎の図（写真右）は、耕斎79歳の作である。見たこともないであろう虎の鋭い眼光と獲物をねらう差し足、踏み足の筋肉感が見事に描かれている。

耕斎は、大正11年1月14日、自邸で死去した。齢84だった。

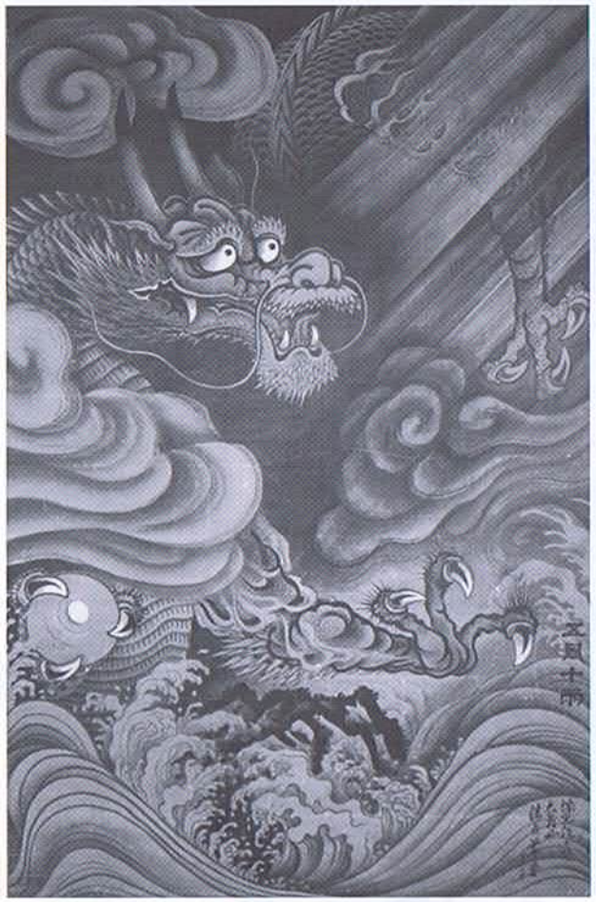
亡くなった翌年に碑が建立される

耕斎は画人として門弟を育てる一方、神照村村長などを務めた地方自治功労者としても

清水節堂（しみず　せつどう）

明治9年1月15日（1876）～昭和26年2月（1951）
本名：小吉

長浜市大路町に生まれる。中川耕斎に師事。その後東京で橋本雅邦らに師事。一筆で勇猛な龍の姿を描く「一筆龍」を得意とし、公家を中心に頒布された。ほかに代表作として「幽霊図」（徳源院蔵）などがある。師を同じくした加納凌雲との往復書簡が残る。生家には顕彰碑が建つ。「龍昇図」は昭和24年の作品（→24、31ページ参照）



▲龍昇図（清水節堂・画　湯田公民館蔵）

谷口清琴（たにぐち　せいきん）

明治9年（1876）～昭和15年（1940）
本名：あい

長浜市朝日町（下船町）に、医師・西村善吾の三女として生まれる。父は、書や南画、能楽、茶道などに秀でた文人であり、長浜湖東焼の創始者として知られる。
彦根の大橋文岱に師事した後、東京で川端玉章の門下に入る。28歳頃に帰郷し、京都の今尾景年に入門。花鳥画を得意とする。明治38年、亀岡で醤油醸造を営む谷口家に嫁ぎ、二男三女の母となる。その後は筆を執る余裕がなかったと伝わる。夫は亀岡三筆に数えられる。「風影湖」は明治37年ごろの作品

▲風影湖（谷口清琴・画　長浜城歴史博物館蔵）

▲天女図（加納凌雲・画　知善院蔵）

加納凌雲（かのう　りょううん）

明治11年（1878）～昭和33年（1958）
本名：きく

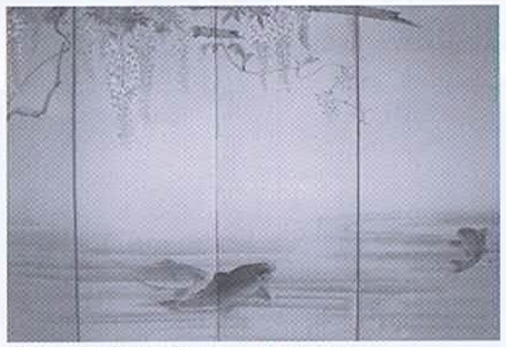
長浜市加納町の酒造家・加納清九郎の三女として生まれる。小学校で教鞭を執りながら中川耕斎に学び、東京で野村文挙・野口小蘋・橋本雅邦らに師事。
代表作は知善院本堂内陣の天井画「草花図」と「天女図」。精緻な描写で描かれる。（→2・31ページ参照）

加藤玉亭（かとう　ぎょくてい）

明治18年（1885）～昭和30年（1955）
本名：宗太郎

長浜市川道町に生まれる。川合玉堂に入門するが、父が早世したため帰郷。山水画、鯉の絵を得意とした。戦時中に「勝貫」と改号する。郷里には玉亭の絵を所蔵する家が多い。

▲大正美人図（部分）（加藤玉亭・画　個人蔵）



▲鯉図屏風（部分）（加藤玉亭・画　個人蔵）

杉本鳩荘（すぎもと　きゅうそう）

明治12年（1879）～昭和8年（1933）
本名：吉之輔

長浜市朝日町（八幡町）に生まれる。西田天香、柴田源七らと親交のあった実業家であり、書を日下部鳴鶴、絵を富田渓仙・橋本関雪に学んだ文人。37ページ中段の額にも絵が残される。白鴎会を組織して洋画の研究にも勤しむ。
晩年は長浜市室町に居住。良畴寺に墓がある。「帰雁独釣図」は昭和7年初冬の作品。

▲帰雁独釣図（杉本鳩荘・画　長浜城歴史博物館蔵）